

歓待を再発明する

クロード・ラフェスタン*
(遠城 明雄** 訳)

Claude Raffestin
Réinventer l'hospitalité
Communications 65 1997, pp.165-177

問題の系譜学のための座標

ルロワ・グーランが指摘したように、都市が出現すると、確固とした社会の階層化が生じ、また軍事的であると同時に宗教的な権力からなるエリートの手中に、穀物の蓄積と権威が固定化されることになった。事実、都市は、人間の生態生成から生じる空間、時間、文化の新たな不連続性の編成であり、その場であった。この生態生成は、始源の領域性を条件づけていた政治、経済、社会の諸変動によってもたらされた複雑性の原動力のことである。そして領域性は、ある社会がシステムの諸資源を考慮しながら、可能なかぎり最大の自立性を獲得するという見通しで、そのさまざまな欲求を満たすために複数の媒介の助けを借りて、自己自身とのみならず、外部性および他者性と維持する関係の総体として定義できる。都市は現在まで、私がさまざまな欲求と自立性を取り上げることで再び触れることになる、この不連続性の賭金であった。

あらゆる人間的生態システムが明らかに境界を画定されているとしたら、ましてや都市は、ローマの建国神話がそれを強調して想起させてくれるので分析に便利のように、境界を画定されている。都市の境界はもともと儀式的の対象であり、そこに権威を行使する人間の意図、つまり権力が見出される。つま

り *regere fines*, 文字通り、直線で境界線を引くという意味である¹⁾。*regere* という動詞に続いて、より高次の力を授けられた *rex* という単語が現われる。都市のあらゆる建築物に先立つこの所為は、王が都市の境界を記す溝を引くと同時に、道德秩序も創始するという意味で、物質的のみならず非物質的な振舞いである。したがってこの観念は二重性を帯びている。なぜなら、内部性と外部性をきわめて厳密に定義する物質性—境界線—と道德規則—規範—とを指示しているからである。この厳密さは必要であり、かつ本質的でもある。その理由は、境界線の横断がどの点まで規制されているかのがわかるからである。ローマの建国神話で許可されていない侵犯は死をもたらす……。あらゆる境界は意図的かつ自発的なものであって、時に人がそこに読むのと反対に、それはけっして任意ではない。

外部性から内部性への横断は、ある儀式、まさに歓待の儀式によって調整された許可あるいは招待を前提とする。歓待とは暴力に訴えることなく境界の侵犯を認める儀式である。歓待は、あらゆる周縁(それが物質的であろうとなかろうと)、つまり暴力と招待、平和と戦争、生と死の対位を実現する周縁を特徴づける「メカニズム」である。

境界は、「こちら側」の都市領域と「あちら側」の都市化されていない領域を画定する。この境界線は

* 元ジュネーヴ大学

** 九州大学

都市と非都市を定義するので、きわめて重要である。それは *foris* と *domi* の間の差異である。「《外》は、《戸口から》始まるがゆえに、「自分の家 *domi*」にいる者はそれを *foris* と呼ぶ。*Domi* は換喩によって *polis* そして/あるいは *civitas* とみなされる^{訳注}。閉じているか、開いているかによって、扉は内・外双方の世界の断絶もしくは交流のシンボルとなる。つまり *dominus* の権力が及ぶ範囲を限定する占有空間、安全の保障される閉じられた場は、まさにそこから他所の、そしてしばしば敵対的な世界に向けて開かれるのである(…)。扉の通過儀礼、扉の神話学は、こうした表現に宗教的なシンボリズムを与えている²⁾。「*domi* に対置される言葉は、今度は、*ager* 《畑》(派生した副詞 *peregri*, *peregre* であり、そこからさらに *peregrinus* 「異邦人」が派生する)である。³⁾」別のインド・ヨーロッパ諸語において、畑という名詞は外部という考え方に結び付けられる。バンヴェニストが明快に説明しているように、耕されていない畑、つまり無人の空間は、人の住む場と対立する。この物理的共同体の外側に、敵対的である異国が始まる。*Agros* から派生したギリシャ語の形容詞は、*agrios* であって「野生の」を意味する。家は建築物の名前によってではなく、その社会的かつ道徳的性格によって定義されることになる⁴⁾。それは都市、*civitas* にとってもいわば同じであり、純粋に形態学的に構築されたひとつの全体としてよりも、社会構築物としてみられるべきである。

境界線はまた「前」と「後」を規定し、抽象的意味で境界線を創始する文化と相互交差する時間的価値づけも支配する。そして道徳的意味における境界線という考えは、この抽象的意味でのそれに由来する。都市は境界を画定され、その存在によって文化の世界と野生の世界を制定する。「野生人」エンキドゥと戦うギルガメッシュの叙事詩は、エンキドゥがいかにして不可避免的に自然から文化へ移行するのを示している⁵⁾。野生人は「文化の世界に組み込まれて」以後、もはや元の世界に戻ることはできない。

定着性の領域である都市に、移動の空間である遊動性の空間が対立する。内部の空間に外部の空間が対立し、そのコミュニケーションの諸規範は、かつては不動性の世界と移動性の世界との出会いを調整する歓待の法によって、確立されていた。ギリシャ

社会で、ヘステシア *Hestia* と ヘルメス *Hermès* の対が内部と外部の間の対立を明瞭に示している。ヘステシアは固定性、不変性、永久性のシンボルであり、その印である。それは家をけっして離れることなく、そこにとどまる。つまり「固定点であり、人間の空間を方向付け、組織化する中心である⁷⁾」。ヘルメスは、人間の家に住むならば、伝達者、この場合には客、遠方からやって来てすでに出発の準備をしている旅人のようにふるまう。「ヘルメスには固定され、安定し、永続し、限定され、閉じられるものはなにもない。それは空間と人間世界において、状態の変化、さまざまな移行、異国の諸要素との接触を表象する。家のなかでヘルメスの場所は、闕を守り、盗賊たちを追い払う扉である。なぜなら、ヘルメス自身が盗賊であって、ヘルメスにとっては錠も扉も境界もないからである。[...]それは異邦人に対して伝令官、伝達者、使者の役目を務める。彷徨する神、大地の上そして大地へと向かう道の支配者。ヘルメスはこの活動で旅行者たちを導く⁸⁾。」「ヘステシアでは、内部、閉鎖、固定、人間集団の自分自身への沈潜。ヘルメスでは、外部、開示、移動、自己以外の他者との接触。」ヘステシアとヘルメスは、いわば空間とその利用を創設する。歓待はこれらの諸条件において、特別な価値を有する。なぜなら、それは移動性と不動性、遊動性と定着性、の接合を可能にするつながりを創設するからである。

二つの世界の「橋」としての歓待は、事情に応じて既知と未知、位置を定められたものと彷徨するもの、友人と敵、の接合を表す社会生活における統辞的要素である。ここで、ナチズムと妥協したドイツの著名な法学者カール・シュミットによって確立された、友敵の区別を想起しなければなるまい。友と敵の弁証法は、シュミットにとって政治の根拠であって、平和と戦争の対位—その背後に歓待のメカニズムが姿を見せる—も明らかにする。

文化に根を下ろすことで、歓待は再生された形式で維持される儀礼の対象となる。この段階で、歓待という観念それ自体の再考が絶対に必要であるように思われる。この観念は、迎え入れる人々と迎え入れられる人々の関係を基本的に確定するものであるとしても、この関係をはるかに超えるものだからである。

歓待とは、人間がそれを通じて他者と維持する慣習的行為の認識と考えられる。迎え入れる人は、したがって定着状態にあるが、実際には待機する移動者、異邦人であるのに対して、迎え入れられる人は、遊動状態にあるが、実際には待機する定着者である。我々は潜在的な対称性を論じている。一方は他方の延期された、あるいはヴァーチャルなイメージであり、そこに逆転された時間性の存在がある。定着と遊動は別のものであるが、それは延期された仕方によってそうになっている。一方が他方に、他方が一方になりうる。双方はひとつの大きな交換体系に属しており、その対位する諸部分は無限の時間的過程のなかで延期され、受容される。

客とは「異邦人 *étranger*」から派生した言葉である。つまり望ましい異邦人イコール客、敵対する異邦人イコール敵である。*Hostia* とは「神々の怒りを償うための犠牲」である。*Hostis* は歓待制度の基本である「償いの関係にある人」である⁹⁾。歓待は、その和らげられた形式であるポトラッチを参照することで説明される。歓待はひとり人間が他者と結びつけられるという考えに立脚している。*Hostis* は享受した貢物に対する償いの義務によって常に互酬的な価値を有している。ホメロス以後、ギリシャ語の *xénos* は異邦人および非一国民となり、*hostis* はラテン語で敵になった。

歓待の法(*thémis xeínon*)は、特にホメロスやヘロドトスのテキストが証言するように、古代においてもそれでもなおいたるところに存在している。その法はすでにユダヤ教的であって、またキリスト教的でもあるだろう。「あなたを迎え入れる人は私を迎え入れるし、私を迎え入れる人は、私を送り出した人を迎え入れる」(マタイ伝 10,40)。

境界線と歓待

これまでは都市と「家」の境界線、さらには国家の境界線、言い換えると言葉の近代的な意味で領域の境界が問題であった。境界線の観念は、外部に対して内部に法的に用いられている諸価値、諸規範を参照させることで、物質的であるのみならず、非物質的あるいは抽象的でもある。内部にいる人々はこ

れらの価値と規範を参照し、この価値と規範の体系に応じて外部からやってくるものを解釈する。この体系は、外部からやってくるものとの関係で意味あるいは無一意味を語るメカニズムである。それを「記号圏 *sémiosphère*」と呼ぼう¹⁰⁾。記号圏とはこの記号空間であり、その外側で記号化は不可能となる。その境界は抽象的な特徴を持っている。なぜなら、記号圏の「閉鎖」はそれが見知らぬものと関係できないという事実によって示されるからである。外部の諸要素が、記号圏にとってひとつの現実となるためには、内部空間の言語に「翻訳」されねばならないか、あるいは非記号的な諸事実を記号化しなければならない。境界線は「翻訳」の場である。つまり外部を記号圏の内部言語に翻訳することである。記号圏は外部の非コミュニケーションをコミュニケーションに変換する、すなわち、外部から到着したものを記号化し、情報に変換する。文化空間が領域的性格を持つ場合に、記号圏の境界は空間的な意味を負う。「家」、都市、国家の場合に、それらを特徴付ける記号圏はその領域と多少ともはつきりと一致しうようになる。

歓待と関係のあるいくつかの事例だけを取り上げるとすると、移民、すなわち広義での歓待の能力、に関する記号圏の諸要素を提起できるだろう。移民政策は、スイスで用いられている三つの圏の境界線のように、抽象的境界線に応じて物質的境界線で選別を行う。つまり移民は、西洋人の在外居留者である第一圏から離れれば離れるほど選別される。第三圏の異邦人は第二圏のそれよりも敵視され、第二圏自身も第一圏より敵視される。この場合に、物質的境界線は慣習的な意味で、いっそう強調される記号圏の境界によって、その越境の可能性を強く条件付けられている。なぜなら、記号圏の境界が通過する者としなない者を重層的に決定しているからである。移民の割当数に関するアメリカの古い政策は、かつて同じ形式の記号圏によって維持されていた。北部の記号圏のこの目に見えない境界線を、南部諸州のアフリカ系アメリカ人以上に体験した人々が他にいるだろうか。彼ら(彼女ら)の多くは、三十年前にデトロイトやシカゴで運を試そうとしたが、出身州よりも厳しい北部での差別を受けた後、南部に戻った。たとえ多くの抗議が市民社会の構成員の一部から

立ち上がったとしても、近年さまざまな都市において、その市域で住所不定者を禁止するという当局によって採用された決定は、諸集合体の記号圏を修正した。

歓待を求める異邦人は、「夢見る」あるいは夢見ることのできた場所からみずからを切り離す、物質的境界線を越えることができるが、ほとんどの場合に迎え入れられた場所の記号圏の目に見えない境界線に衝突することに気がつく。この境界線は物質的なそれと比べてはるかにたちが悪い。それは乗り越えられないにもかかわらず、異邦人に意味を与えたり、拒否したりするからである。この事例は十分あるが、それを長々と論じることはしない。物質的境界線は、非物質的なそれと比べて簡単に越境できる。記号圏のメカニズムを通じて歓待が問題にされるならば、それは内部世界と外部世界の間に対立があることを意味する。招待を可能にするための差異の「翻訳」という現象か、あるいは紛争を作動させるこの差異の拒絶かである。したがって、内部の記号圏によって拒絶されたが、少なくとも内部に存在している客は人質となる(この言葉は「客」から派生している)。一時的に利用されたが、社会に統合されなかった中世の異邦人(例えばゲットー)のように、望まれていないが、それでも政治的あるいは経済的な理由で迎え入れられた異邦人はたちまち人質となる。したがって、ルネ・ジラルが理論化したように、客とはスケープゴートであり、その状況が急激に維持し得ないものになるには、内部性においてひとつの危機があれば十分である。ユダヤ人の歴史は数世紀にわたってそれを証明している。世界を引き裂く内戦の結果生じた難民たちの歴史もまた同様に、それを証言する(この難民は現在、世界の人口のほぼ2%に達している)。この難民たちに対して、たいていの場合に周縁的な「境界地帯」で墮落した歓待しか提供されない。墮落した歓待、我々の地域における移動集団—例えば、ジプシー—に対して行われているように、難民は牛耳られているのである。この場合に、物質的境界線と非物質的なそれとの一致がみてとれる。直接には見ることのできない後者の境界線が物質的境界線を強化しているが、別の状況では物質的境界線には大きな効果がないかもしれない。領域上の境界線と記号圏のそれを一致させる試みが存在す

るが、それは常に頓挫する。いわば純粋な内部性へのあこがれ、旧ユーゴスラビアにおけるその結果は周知のことである…。

難民のための家が建設されたほとんどすべてのヨーロッパの都市でさえ、敵意の表明が噴出してはいるけれども、そのイデオロギーはとりわけ内部性の「純粋性」というこの意志によって、助長されているのである。

欲求、自立性、歓待

再度取り上げねばならない領域性という観念は、すでに見たように、システムの諸資源と可能なかぎり両立しうる最大の自立性を獲得するという見通しで、欲求を充足するための諸関係の総体を意味することはみた。アンリ・ラボリの定義を再び取り上げると、欲求とは、機能状態にある生きた構造を維持するために必要なエネルギーと情報の量である。古典的歓待は、この言葉の歴史的意味で、基本的(生理的)欲求と安全性の欲求、すなわちある場合には強制的な移動の只中にある人たちの欲求、例えば宗教上の理由による無償の関係、つまり非経済的関係を通じた励ましと愛情の欲求、を満たすことであった。失業して路上に放り出された人々と、その人たちにとって古典的な歓待がよりよい日常を期待するための手段となったこと、も忘れてはならない。ある見方からすれば、歓待は調整的役割を果たしており、不利な立場に置かれた人々にとって、困難な環境で最低限の自立性を保持することを可能にした。実際に歓待の規則のおかげで、こうした人々は環境との偶発的な諸関係を維持し続けて、その結果再定住の可能性を期待しながら、移動することを止めなかった。しかし、本来的に歓待が少なくとも部分的にこれを可能にしたとしても、都市での「貨幣重視」は、慈善と人道という形式の下でなければ、この古典的歓待をますます衰退させた。古典的歓待が急激に衰退したならば、ユダヤ・キリスト教とイスラム教の伝統で価値をもっていた貧者の巡礼の彷徨は、現在ではもはやいかなる積極的な意味をもたないことを想起しよう¹¹⁾。

都市のこうした完全な貨幣化は、純粋に経済的形

式の交換関係を他の諸関係の上位に置いた。それ以来、開かれた贈与としての歓待は、ますます富の濫費、奢侈として考えられるようになり、それゆえジョルジュ・パタイユが語ったように、「呪われた部分」となった。「それは必要なものではなく、その反対物、「奢侈」であって、生きた物質と人間に根本的な問題を提起する¹²⁾」。見かけ上は非生産的な消尽である歓待は、商品、とりわけ貨幣に完全に身をゆだねている現代社会にひとつの問題を提起する。「資本主義はある意味で無条件に物に身をゆだねるが、その帰結には無頓着で、その向こう側に何物も見ない。」この向こう側は、まさに経済システムによって彷徨へと投げ出された人たち自身のために、保持されねばならない限定された自立性である。経済システムは、効率性を理由にしてこうした人々をものは社会的に統合することができず、またそれを望みもしない。この場合に我々は、長期失業者の問題に触れており、そのなかの何人かは彷徨のなかに消えていき、その後にはしばしば狂気と死があった。

歓待のいくつかの形式が、この彷徨の衝撃的な結果を緩和するために都市で再構築されている。受入れセンター、心のレストラン、避難所などである。国家もまた異なった形式で介入するとしても、一時的な歓待は、多くの場合に民間主導に任されている。しかし、本当の歓待よりも組織された慈善の方が多い。現代都市は、経済の超自由主義にゆだねられてしまっており、現代的な彷徨を表す排除に抵抗するための特別な構造を備えていない。そして数年前から考えられてきたように、この彷徨は移行的でもなければ状況的でもなく、構造的なものなのである。

ヨーロッパにおいて住処のない人々は、我々全員が出会う構造的与件となっている。内戦によって難民数が増加したのと同様に、経済システムによって放り出された人々の数もまた増大傾向にある。それは内部の難民であって、当局はそれを周縁部あるいは周辺部に押さえ込みたいと思っている。しかし、どんな周縁部あるいは周辺部であろうと、そこに問題のすべてがある！ ここそこで起こっていることを観察すると、諸都市の内部にある社会的休閒地(W.ハルトケの *Sozialbrache*)の一種の「植民地化」が進んでいることが確認される。例えば、スクウォッターとして回復された放棄された建物や廃止された工

場。こうした状況に対応する歓待の構想の不在は、都市内部で暴力の反射を始動させる危険性がきわめて高く、最近そのいくつかの事例が知られている。歓待の現代的な儀式の不在によって、こうした暴力が避けられなくなっており、この場合に異邦人と同一視される彷徨する人々は、敵、つまり潜在的な *hostis* と見られる危険がある。

かつて個人にその地位を付与した政治的都市国家からの排除によって、人があらゆる安全性を失ったとしたら、今日いまだ唯一の座標を提供する都市の経済システムからの排除によって、すべての安全性が失われることになる。現代都市は、経済システムの内部にいる人々と外部にいる人々との対決によって、友敵という政治的なものの野生の根拠を再発見しつつある。市場の法は、あらゆる関係を無料ではない有償の外部性と他者性にしようとするので、貨幣収入を奪われた人々はみな、「経済都市」の外側に放り出される。彼ら・彼女らが潜在的脅威とみなされ、時にそのように体験される限りで、潜在的な紛争を未然に防ぐための解決策が見いだされねばならない。この結果、いくつかの都市は、住処のない人々に対して特別な場所を創出したし、またそうしつつある。それは都市の「標識」として知られており、住まいやテントを提供するのではなく、そこで望むならばトイレを利用し、洗濯を行い、医療行為を受けることができる。それは無料の衛生と健康の空間である。都市を移動する人々のためのこの新たな「オアシス」は、中世都市のかつての歓待の構造を再び始めたものである。「オアシス」という語は、そこでイメージを作るためでなく、その性質を示すためのものである(ジュネーヴで、類似の受入れ組織は「水場」という名前を与えられている)。さらに食事と宿泊のできる別の諸組織も存在する。

これらの歓待の形式は、贈与の観念と再び結びついて、移動を強制する都市において新たな移動生活を送る排除された人々に、最低限の自立性を提供することができる。それは、希望なき彷徨、あらゆる枠組とすべての社会化を欠く彷徨に対する緩和剤である。

我々はここで時間の問題に触れている。なぜなら、この排除された人々は、一日の区切りが満足すべき欲求のままに、ある場所から別の場所への移動によ

って調整されている限りで、まったく特別な昼夜の生理学的リズムに従っているからである。かつては内部と外部の間に存在し、季節あるいは年周期のリズムで展開されていたことが、都市スケールおよび都市の内部でさえ再発見される。昼間用と夜間用で区別される受入れ組織はかつての行動を参照している。つまり夜、あらゆる異邦人は *hostis* になる。これらのあらゆる制度が住処のない人々の一日を枠づけるのである。

こうした歓待の形式の再発明は、公よりも民間の率先的な活動に根を下ろしており、一種の自然道徳の表れであるが、現代社会の矛盾をとめどなく際立たせている。現代社会において、経済システムは排除の諸問題を反映する一種の「社会淘汰」に従って振舞う。そしてこの選択は、暴力の爆発の回避が望まれるとしたら欠かすことのできない、多少とも自発的な相互扶助が出現したとしても、排除の問題を生じさせる。経済内の世界と経済外の世界という二つの世界の「脆弱な」つながりを確かなものにする社会的統辞法の要素として、歓待の意味作用が再発見されるのである。

場所、都市景観、歓待

現実の都市を考えると、「直接的な」歓待と呼べるようなものが存在しており、それは新たに到来した人—旅行者であろうとなかろうと—が、直接的に向き合うものである。異邦人がなんの困難もなく、ただちに自らの位置を確認できるような複数の情報をすずんで提供する都市である。そしてできるかぎり豊富な情報を贈与し、そのことによって自己確認を行い、また確認される都市である。これは政治および行政当局と、ある意味で異邦人にとって認識の源泉である居住者たちとによって「提供された」、「情報上の」歓待と呼べるものである。つまり移動性のきわめて高い都市において、信頼性の高い情報を提供できる居住者に会うことは、しばしば困難を伴う。

十分に識別、同定された都市において、異邦人は、迎え入れられ、十分に受け入れられていると感じ、またどこに行くのかを知っており、時間をかけずに

探しているものを発見し、道に迷うことなく遊歩と思索にふけることができる。この場合に情報が贈与に類似する。情報の提供と受容が歓待のメカニズムである。ヨーロッパで十分に同定されていない都市は、なんと迷宮に似ていることだろうか！ そこで異邦人は自分の位置を確認するために時間を浪費するので、自己を見失い、都市を訪れる喜びは失われてしまう。こうした歓待は、簡単だが有効な地図を無償で自由に利用できること—新たな贈与—に翻訳されねばならないといえるだろう。この歓待の形式は、建築物、博物館、文学などの遺産の発見を可能にする特別な経路を示唆することで、さらに発展させることができるだろう。都市ツーリズムの事務所は、安全に過ごすこの公式の歓待を増やすために、いくつかの分野で学生たちを養成することが想像できるだろう。異邦人は、安全を感じない場所で非歓待に直面するだろう。そしてこの非歓待は、都市のイメージ、あるいは都市がいずれにせよ帯びることになる表象に、きわめて否定的に跳ね返ることになる。スペインの警察署で強盗の被害申告用紙は、強盗が日常茶飯事だと想定されているので、すべての大インド・ヨーロッパ語と日本語で作成されていることは知られている！ 安全へのこうした欲求は、さらに有用な情報が多言語の形式で、しかも警察署以外でも提示されるならば、それだけで相対的に満たされるかもしれない。

この点はとりわけ、レストランと商店のような財とサービスの分配の場にも関係する。これは、通過する異邦人を歓待する都市になるために、複数の雇用を創出するなんらかの情報投資を行うべきだということを意味している。

都市によって提起された別の問題は、注意深い観察という問題である。長い間、物質的かつ非物質的な遺産という都市の富の発見は、無償あるいは少なくとも僅かな費用で行うことができた。ある都市の歓待の程度は、この発見にかかる費用で評価できた。今日、この観察はもはや無料ではない。そのまなざしは利潤の源泉となり、それ自体搾取される。外部から眺めているうちはまだ無償だが、「遺産の敷居」をまたぐと、その関係は経済的なものとなる。それは遺産の維持にかかる費用という理由から考えられるとしても、少なくとも認識の贈与、なかでも審美

的欲求の充足が公共的歓待のメタファーであることは忘れられてはならない。すぐれて有償の関係の場である経済圏が、自由に情報の贈与のできる公共圏によって修正されず、また補われなかったら、社会文化の骨格は長期的にはひどく危うい状態で、分裂の危機にある。認識の贈与による歓待は、都市の異種混溶性の原理と特にその社会多様性の豊かさを保証する方法である。認識の無償あるいはほぼ無償の贈与は、おそらく最終的には無償でないそれよりも利益が上がるだろう。上で問題にした排除された人々は、無償の関係の時間と場所の消滅が原因となって、「内部性」においてもはやいかなる審美的欲求を満たすことができないし、満たせないだろう。

都市の一般的歓待は、いまなお都市計画、言い換えると都市景観の一般的整備と公共の場所の組織化に従っている。考え得る他の多くの事例はさておき、私は公共の場所の事例だけを取り上げよう。それは西洋において定義上、歓待の場所として重大な役割を果たしてきた。伝統的都市において、その場は歴史的な都市国家(シテ)の活気ある中心として、複数の慣習的行為をもたらす諸機能の集合であった。ローマの公共広場(フォーラム)は長い間、多様な場所の始原の母体であった。つまり教会、市民、市場の場所であった。こうした場は、内部においてそして内部にとって、根本的に外部の場所であった¹⁹⁾。古典的な場所とは、一日の時間と一年の季節に応じてそこで行われたあらゆることの形式と特徴を帯びた、組織化された空虚であった。要するにそれは、そこに痕跡を残した過去、一定のリズムにしたがってそれを生き生きとさせている現在、さまざまな表出によってしばしばそこに到来のきざしを示す未来、の縮図である。

近代的な場所は、一方で自動車の普及、他方で遠距離通信の発展にもなあって、そうした歓待の性格を大幅に喪失した。それはもはやスペクタクルの場でも、対面的かつ対話的な意味で無償の出会いと交換の場でもない。イスネンギ(Isnenghi)にとって、現代の真の場所はいまやあらゆる家のなかにあって、遠隔操作を用いたテレビによってもたらされる。「魔法箱を親指でたたきただけで、我々はセニガリアの祭りからサマルカンドの広場へと一気に移動したことに気づく。」私は、こうした指摘から、外部性と

他者性の受入れが、常にますます間接化されたことで、都市における歓待の根っこにある対面性を衰弱させる傾向にあることを取り上げるだろう。我々は匿名の異邦人との直接的な関係を、いつでも中断できる媒介された関係に代えてきたのである。

結論にかえて…

贈与観念が多くの伝統社会で人類学者たちの関心を引きつけてきたとしても、反対に現代社会の枠組において、それは全くあるいはほとんど作動することはなかった。なぜなら、現在のシステムにおいてたいいていの場合、貨幣に対して「商品」を、あるいは「商品」を交換して貨幣を、獲得することだけが求められるからである。古典的取引が表現する経済交換は、それ自体を枯渇させてしまう。なぜなら、関与する諸主体の自由にできる交換の期限によって限定されているからである。贈与の場合に、その関係が尽きることはない。なぜなら、贈与とは、まさに空間と時間を通して、贈与する側と受け取る側との関係を安定化し、維持するために利用される道具だからである。贈与は内部と外部を架橋するための社会文化的なプレグナンツを始動させる機知である。その結果は、おそらく期間に無関心ではないとしても、それでもなお経済圏の外に位置する関係性を生産することになる。こうした関係性が存在するゆえに、経済圏と結び付いた諸関係が生じ、安定化され、維持され、そして再生されるのである。ポトラッチの採用あるいはその近代的形式がなければ、都市の経済活動は混乱をきたす危険性が高い。スクウォーターに住む人々と「契約」する放棄建築物の所有者たちは、そのことを理解していた。所有者たちは住処のない人々に対して一定の期間、「歓待」を与えるのに対して、住処のない人々はその代償に住宅を維持するか、少なくともそれがひどく劣悪化することを回避するのである。こうした契約は都市の歓待の現在の形態を示している。

社会的休憩という概念は、同様にこうした見通しのなかで再考されるべきものである。なぜなら、それはしばらくの間放棄された使用価値を、それを維持するために働くという代償以外のなものも要求

されずに、あるカテゴリーの人間集団が意のままにできる手段となりうるからである。これによって所有者たちは、引き受けたくない、あるいは引き受けられない費用を負担することなく、住処のない人たちに住まいを提供することが可能となるだろう。

複数の都市が、異邦人の諸共同体と国民共同体の間に架橋するための、旧住民と新住民の間の対話の空間を欠いている。それは情報の贈与にもとづいた歓待を想起させる別のやり方である。長く続く多くの紛争は、公共空間、私的空間、そして生活リズムについての異なった考え方や慣習行動によって醸成された無理解にその起源がある。それぞれの空間やリズムは、出身地では自然だと判断される行動に根を下ろしているが、受入れ場所では受け入れられず、排斥される。この対話の諸空間は、都市の一般的歓待を改善するためにきわめて有用だろう。なぜなら、「いかなる調和もけっして差異を抽象的に超越することはできないだろうし、いかなる差異も調和の抽象的否定として明確化されない¹⁵⁾」からである。

訳注

ラフェスタンが参照しているバンヴェニストの文章には、この一文だけが存在していない。したがって、この一文が別の個所からの引用なのか、それともラフェスタンの意見なのかは確認できない。

注

1) Cf. Claude Raffestin, *Éléments pour une théorie de la frontière*. *Diogenes*, 134, avril-juin 1986, p. 4-21.

- 2) Émile Benveniste, *Le Vocabulaire des institutions indo-européennes*, Paris, Éd. de Minuit, 1969, vol.1, p. 312-313. エミール・バンヴェニスト著(前田耕作監訳)『インド=ヨーロッパ諸制度語彙集 I 経済・親族・社会』言叢社, 1986年。
- 3) *Ibid.*, p. 313.
- 4) *Ibid.*, p. 314.
- 5) Cf. *L'Épopée de Gilgames*, trad. de l'akkadien et présenté par Jean Bottéro, Paris, Gallimard, 1992.
- 6) Jean-Pierre Vernant et Vidal-Naquet, *La Grèce ancienne*, t. II, *L'Espace et le Temps*, Paris, Éd. du Seuil, coll. «Points Essais», 1991, p.49.
- 7) *Ibid.*
- 8) *Ibid.*, p. 50-51.
- 9) Benveniste, *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, *op.cit.*, p.94.
- 10) Jurij M. Lotman, *La semiosfera*, Venise, Marsilio Editori, 1985, p.58.
- 11) Cf. Roderick J. Lawrence, *Deciphering Home: An Integrative Historical Perspective*, in *The Home, Words, Interpretations, Meaning and Environments*, Avebury, 1995, p. 53-68.
- 12) Cf. Georges Bataille, *La Part maudite*, precede de la *Notion de dépense*, Paris, Éd. de Minuit, 1967. ジョルジュ・バタイユ(生田耕作訳)『呪われた部分』二見書房, 1973年。
- 13) Cf. Mario Isnenghi, *L'Italia in piazza*, Milan, Mondadori, 1994.
- 14) *Ibid.*, p. 9: « Un semplice colpo di police sulla scatola magica et ecco, dalla fiera di Senigallia, ci troviamo trasferiti d'un tratto sulla piazza di Samarcanda. »
- 15) Massimo Cacciari, *Déclinaisons de l'Europe*, Combas, Éd. de l'Éclat, 1996, p. 29.